外国人として生きる

ドミニカ人選手たちの兄貴分

窪田 暁（くぼた さとる）
総合研究大学院大学文化科学研究科

裏方助っ人として

「危ないぞ！ルイス。」ノックバットをもったコーチから声が飛ぶ。名前を呼ばれた選手は、目の前に転がっているボールを拾い上げると俊敏な動作で防球ネットの後ろに身を隠した。フランシス・ルイスさん（三〇才）、名古屋に本拠地を置くプロ野球球団・中日ドラゴンズのブルペン捕手兼通訳というのが彼の肩書きである。名古屋ドームで試合のある日は、正午過ぎには球場に入る。チーム練習が始まると、選手のキャッチボール相手、ノックの球拾い、そしてコーチと選手間の通訳など、息をつく間もない忙しさだ。試合が始まると、ブルペンに移動し、中継ぎ投手であるドミニカ人二人の側を離れない。試合が終わって帰宅し、遅い夕食を済ますと、「疲れて、すぐに寝てしまう」というハードな毎日だ。

世界への入口

カリブ海に浮かぶ小さな島国、ドミニカ共和国はアメリカのメジャーリーグ・ベースボールに多くの大リーガーを送り出す国として知られている。安価で優秀な才能を見逃さない大リーグ全球団がそれぞれ、ドミニカ国内に、選手発掘養成施設としてベースボール・アカデミーを設けている。そこからは、ホームランバッターとして有名になったサミー・ソーサ選手やペドロ・マルティネス投手など毎年多くの大リーガーが誕生している。

ルイスさんはドミニカの地方都市、エル・セイボ出身。周りの子どもたちと同様に物心のついたころから空き地で野球をして遊んだ。一三才になると、近所の球場でやっている野球教室に入り本格的に野球の練習を開始する。ちなみにこの野球教室は、ドミニカ全ての町にあり、アカデミーを目指す少年たちは、学校が終わると鞄をグローブにもち替えて球場にやってくる。授業料は無料で、誰もが練習に参加できるのも特徴だ。

一八才のとき、広島カープ・アカデミーでコーチをしていた同郷の大先輩ヘロニモ氏（元大リーガー）がルイスさんのプレーに興味をもち、入団テストの結果二〇〇〇ドルで契約。当時のアカデミーには、広島カープを経由し、現在も大リーグで活躍中のアルフォンソ・ソリアーノ選手やティモ・ペレス選手が在籍し、アカデミー対抗戦で常に優勝争いに顔を出す黄金期にあった。ルイスさんも彼らとともに主軸打者であったと言うのだから、その才能は計り知れない。一八才のルイスさんにとって、世界への扉が大きく開かれた筈だった。

二一才のとき、ルイスさんに待ちに待った日本行きのチャンスが訪れる。ところが、その内容に耳を疑った。選手としてではなく、ブルペン捕手として、日本の野球を勉強して来なさいとのこと。日ごろから、アカデミーの日本人職員の許へ積極的に日本語を教わりに行く真面目な性格が皮肉にも災いした。悩んだ末、「とりあえず一年間、日本でやってみよう。もしプレーを続けたければ、ドミニカに帰って他のアカデミーを受けたらいい」と決断したのは、子どものころから、父親がアメリカへ出稼ぎに行く姿を見て育ち、いつか外国で働いてみたいと思い続けてきたことによる。

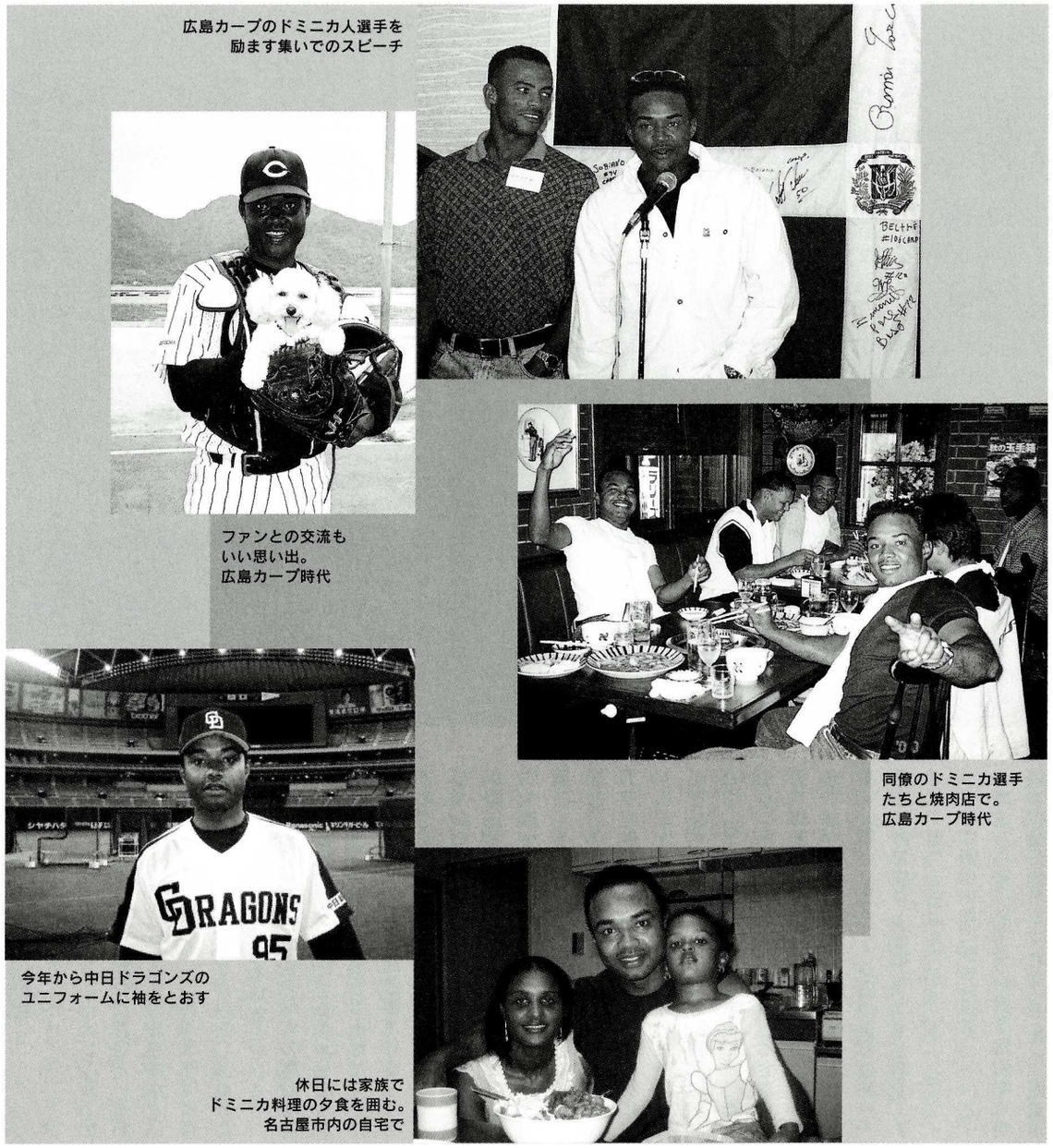
ドミニカ人選手を支える

日本に来て驚いたのは、「上下関係」に厳しいタテ社会の習慣。プロ野球の世界は、国内でも特に体育会系の厳しい社会だから、ドミニカのフランクな人間関係に慣れていたルイスさんが戸惑ったのは無理もない。しかし、真面目な彼は、オーナーに日本語学校に通わせてもらえるよう直訴。日本語を必死に勉強して、敬語を巧みに操りチームメートに溶け込んでいった。いつしか、選手になるという夢も思い出さなくなるくらいに、日本での生活に夢中になっていく。一軍の遠征に同行して、東京や名古屋などの大都市を訪れることもできた。収入もドミニカでは考えられないような金額が手に入る。

気がつけば日本滞在は一〇年になり、今では日本にやってくる同郷出身選手たちの相談相手として頼られる立場になっていた。こういった経歴を買われて、今年の二月に、中日ドラゴンズから引き抜きを受けることになり、四人のドミニカ人選手を裏で支えることが仕事になった。まさに、ルイスさんの天職ともいうべき仕事である。ゲームの無い日には、後輩たちを家に招き、ドミニカ料理の腕を振るう。「初めて日本に来て困ったのが料理とことばだったから」と自分の経験から選手たちの悩みや苦労は、手にとるようにわかっている。後輩たちにとっては頼もしい兄貴分である。

一年契約の厳しいプロの世界に生きて来たルイスさん。異文化で生活するうえでの苦労や不安もあっただろうと想像する。しかし「真面目に頑張っていれば、絶対に大丈夫だから」と話す口ぶりからは、絶対に日本で成功してやるといった特別な気負いは感じられない。それは、大好きな野球の仕事に就けたことや、何事も「とにかくやってみよう」という生来の資質によるところが大きいように思われる。今年五月には、五年前に結婚しながら、教師の仕事のためにドミニカに残してきた奥さんが来日、忙しい毎日にも張り合いができた。将来のことはまだわからないが、「ドミニカに帰って、日本で覚えた野球を教えたい」との夢をもっている。

一〇年ほど前から、日本のプロ野球にやってくる外国人選手の出身地に、アメリカ以外の国が目立つようになってきた。特に、ドミニカ、ベネズエラ、パナマといったカリブ海周辺地域の出身者が多くなっている。こういった選手たちは、日本の習慣に戸惑い、日常生活でストレスを抱えこむことが多いという。彼らがプレーに集中するために、彼らと日本を繋ぐルイスさんのような存在が、ますます必要とされているのは確かである。当分のあいだ、ルイスさんの「故郷への夢」はお預けになりそうだ。



広島カープのドミニカ人選手を励ます集いでのスピーチ

ファンとの交流もいい思い出。広島カープ時代

同僚のドミニカ選手たちと焼肉店で。広島カープ時代

今年から中日ドラゴンズのユニフォームに袖をとおす

休日には家族でドミニカ料理の夕食を囲む。名古屋市内の自宅で